
作者は不治の病にかかったそうです

眠獣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

作者は不治の病にかかったそうです

【Nコード】

N 6 6 7 6 K

【作者名】

眠獣

【あらすじ】

「うーん、取り敢えず転生するのはどんな物語？」

「ネギまだ」

『ネギま』か、確か弟がそんな漫画をもっていたから借りて読んだ覚えがある。

「だったらまず不老不死に、それと召喚術を使えるようにして下さい」

「別に構わないが不老不死にすると人外になるぞ、それでも良いか？」

「良いですよ」

「そうか、なら今から送るぞ楽しんでくるがよい」

ブローグ

「~~~~~」

僕は今とても機嫌が良い、なぜかという今日は給料日だからだ！
しかも今月は残業が多かったので残業手当がついてうはうはである。

「取り敢えずお金をおろして美味しい物でも食いに行くか」

そうして僕事『如月海斗』は銀行に行く足を速めたのであった。

Side オタク

とある屋上にて

「ふひひひひ…ここから飛び降りて死ねば、私は物語の中に転生できるんだ…あはあはあはははははは…待ってて今そっちの方に行くから」

そして私はビルから飛び降りたのだった。

Side out

僕は今、頭から血を流しながら倒れてる自分を眺めている、所謂幽霊だろうか、周りでは、

「おい！君しつかりしろ！誰か救急車を呼んで下さい！」

「もう今連絡しました！もうすぐ来るそうです」

「おい何があつたんだ？」

「あそこに倒れてる人がビルから飛び降りた女性を身体を張って受け止めて助けたんだよ」

もの凄い事になっていた、実際は歩いていた僕の頭の上に女性が落ちてきたというだけだ。

まあそれはいい、今問題なのは僕の隣で筋肉達磨でビン底メガネを掛けたスキンヘッドのおじさんがムーンウォークをしているという事だ。

取り敢えず話掛けてみるか。

「あのーすみません貴方はどちら様でしょうか？」

「我が名は天照の大神」

あれ？聞き間違いだろうかもう一度聞いてみるか

「すみませんがもう一度名乗ってもらえませんか？」

「我が名は天照の大神である」

うわぁ本物の神様だよ

「それで神様とあろう物が何でここに？」

「貴様を転生させる為だ」

「転生ですか？」

「そうだ本来ならあのオタクの女性を物語の中に転生させる予定であつたがお前が助けてしまったからな、貴様で代用する事にした望みを言ってみる大抵の事なら叶えやる」

「うゝん、取り敢えず転生するのはどんな物語？」

「ネギまだ」

『ネギま』か、確か弟がそんな漫画をもっていたから借りて読んだ覚えがある。

「だったらまず不老不死に、それと召喚術を使えるようにして下さい」

「別に構わないが不老不死にすると人外になるぞ、それでも良いか？」

「良いですよ」

「そうか、なら今から送るぞ楽しんでくるがよい」

皆さん初めまして眠獣です。

作者はSSを書くのはこれが初めてです。

初めてなので、誤字・脱字・文法・慣用句などの間違いが、多々あると思いますので、見苦しい思いをされると思われます。

それでも良いと思われる方は此れからも宜しくお願い致します。

第1話

皆さん初めまして元『如月海斗』です。

やって来ました『ネギま』の世界の旧世界に……………

僕は今とても困ってます。何に困っているかという姿に困っています。どんな姿かというと『魔導書』になっています、いや確かに人外になるとは言ってはいましたが無機物ですか、しかも不老不死になって一石二鳥というわけですね、さらに何処かの遺跡の台座の上に立て掛けられていて、如何にも宝物ですと言っているみたいなものじゃないかと考えていたら僕の頭の中に神様の声が聞こえてきた

【どうやら上手く転生が出来たようだな、どうだ新しい生は】

【最悪です。動けないし喋れもしない此れからどうしろと言っんです？】

如何にも機嫌が悪いという感じに返事をする

【そうだなお前は魔導書だからマスターとなる人物を見付け出し、魔力供給して貰えば人の形になる事が可能だ】

へえーそうなんだ

【でも動けないのにどうやってマスターを見付け出したらいいんです？】

【……………】

【あれ？もしもし……神様返事をして下さい！】

それから神様と連絡が取れなくなってしまった。
これからどうしようかな、取り敢えず待ってみるか

3月後

そう簡単に遺跡に人がくるわけないか、気長に待とう

10年後

まだだ、まだ僕は戦える

200年後

うあ…あ…あ…ああ 意識が朦朧としてきた

400年後

自己防衛のため意識を強制的にカットします

そして500年と32年が過ぎたある日

Side アルビレオ・イマ

私は今攻略不能と言われた『宝石の海』という名の遺跡に挑戦しています、さすが難攻不落と歌われた遺跡です守護者の強さが半端じゃありません、ですが此方にはそれ以上の存在がいます、そしてまさに今ナギが

「止めだ！喰らいやがれ雷の暴風！！」

「グウオオオオオオオオオン」

断末魔の声をあげながら腐敗した龍が光の粒になり消えていった

「ご苦労様ですナギ今ので最後みたいですな」

「アルもご苦労さん、まあ俺に掛ければあんな奴等余裕だけどな」

「取り敢えずは奥に進みましょう」

「そうだな、俺が一番のりたぜ！！」

そう言つてナギはダッシュで奥の方に走って行った
ふふふふ私も追い掛けると思いますか

最深部

其処には台座の上に魔導書が一冊置いてありそれを囲むように6体の石像が部屋の隅に立っていた

「おいアル、台座の上に魔導書があるぜ」

「そうですね、無駄に装飾を施していますがあの魔導書物凄い存在感を感じますね」

「さつさとあの魔導書と契約して帰ろうぜ」

ナギに急かされ私は魔導書との契約の準備を始め呪文を唱える

「魔導書よ我が呼び声に応えた前、我は汝、魔導書との契約を結ぶ者なり汝が身に我が名を刻みつけろ、我が名はアルビレオ・イマナリ」

はつきりいつて私は契約の呪文を唱えながら別の事を考えていた。

【そういえば今日はロリッ娘通信猫耳ブルマ増刊号の発売日だった。

」

呪文を唱え終わったら魔導書が急に光だして人の形になってしまった、しかもその姿はロリッ娘猫耳ブルマだった

ナギは目がひっくり返るんじゃないかと思うくらい目を開いていた幼女はそのままゆっくりと倒れてピクリとも動かない、どうしまし
ようかと悩んでいたらナギが

「取り敢えず連れて帰ろうぜ、悩むのはその後にしようぜ」

そうですね

フフフフフこれからは楽しい事に成りそうですね。

眠獣です。

取り敢えず主人公の姿については契約者のイメージ＋魔力で決まります。

自分で読んで視て何て言うかももう名前だけを借りた別キャラになつてます。

それでも構わないという方はこれからも宜しくお願い致します。

第2話

堀たて小屋（紅き翼の秘密基地）

「——うぁ……………」

頭が痛い、僕は呻き声をあげながらベッドから『身体』を起こした
……………

身体だと！！！！！！

何故僕に人間の肉体がある、というか何故にブルマ？しかも猫耳付
だし……………

取り敢えず猫耳は外すか
それに股の間に違和感が……………

サワサワ……………

「な…な…なないだと！？」

僕の男の象徴が無くなっているだと、僕が絶望感にやられている時
に、ひどく懐かしい声が頭に響いてきた。

【久しぶりだな如月海斗よ時間は掛かったが何とかマスターを得た
ようだな】

神様こと天照の大御神さまだった
なんか急に頭が冷えて冷静になってきたね

【いまさら来て何のようです】

【お前のスキル、召喚術とその肉体に付いてだ、時間が無いので脳に直接刻むぞ】

【えええ…ちょっと待って下さい、脳に直接刻むだな……………】

と僕は言いかけ二回程痙攣して、また意識を手放したのであった

そして次の日

ちくしよ〜〜

あんの神様、待つてと言ったのに全然待つてくれなかった、
頭の中に、ドロドロに溶けたスープを流されてバラバラのジグソー
パズルが出来上がっていくような感覚であった

まあその甲斐があつて何となく今の現状と力の使い方が解った……

……………

解ったけど僕自身の魔力はゼロだった、人の形をとるのも召喚術を
使うのもマスターの魔力供給が必要だということである

どんなにじめだよ、こんな事なら最初の願いの時に魔力無限とか頼
めばよかったな……………orz

取り敢えず落ち込むのはこれ位にして僕のマスターなる人物に会い
に行きますか、どうして僕が女の子でこんな格好なのかを問い詰め

なければ

そう思いながら僕は寝室からでるのであった

S i d e アルビレオ・イマ

何やら寝室の方で物音がしますね、彼女が目を覚ましたのでしょうか？

彼女が魔導書だというのは解っているのですが、他にも知りたい事もありますし、何よりも仲間に彼女の事を紹介しなければ、むっつりスケベとバグキャラが五月蠅いですからね
フフフフフフフ

本当にこの世界は私を飽きさせませんね。

S i d e o u t

ガチャ

扉を開くと其処には全身をローブで隠した1人の男性がいた
魔力の流れ具合からこの人が僕のマスターみたいだが一応確認してみるか

「あつ……初めまして貴方が僕のマスターですか？」
僕が首を傾げながらそう質問するとローブの人が急にたたらを踏みながら後退っていた

「つう……………僕っ子ですかなかなかやりますね……………」
つと
其よりも質問の方ですがその通りです、私アルビレオ・イマが貴方
のマスターです貴方のお名前を聞いても宜しいですか？」

ああ……………どうしよかなあ新しい名前を考えるのはめんどくさいし
前世での名前を名乗ろうかな

「僕の名前はカイトです、魔導書の管制人格を勤めています」

「管制人格ですか、それはどんなことをしてくれるのでしょうか？」

「ええとマスターの補助がメインです、他にも魔力供給をして貰え
れば僕も戦えますので護衛も出来ると思います」

「其では最後の質問です、貴方は何の魔導書ですか？」

「はい、召喚術について書かれている魔導書です」

「そうですか其では私の仲間紹か「ちょっと待って下さい」…ど
うしましたか？」

「ぼぼぼ僕を男にして下さい！！」

そうだ僕は元男なのだ百歩譲って子供なのは許そう、だけど僕は人
間止めても男を止めるつもりはないぞ！！

眠獣です

皆さんこんな駄文にお付き合いして頂きどうもありがとうございます。
今はだいたいラカンが仲間になり姫さんに合うちょっと前くらいで
す。
それとアルビレオとの契約は魔導書との契約であってパクティオー
カードはありません

第3話

「ぼぼぼ僕を男にして下さい!!」

この発言から30分後

僕は…僕は…遂にやり遂げたんだ!!容姿を犠牲にしたとはいえ男の象徴を取り戻したんだ
凄い戦果だ、僕がこの世界に来てから初の白星だ!……………

白星だよね?最終目的である男の象徴を取り戻したんだから僕の勝ちだよね?

Side アルビレオ・イマ

フフフフフフフフ

あんなに嬉しそうにして本当に面白いですね、

話を聞く限り契約者である私の気分次第で姿形はもちろんの事、男である事や女である事も変更可能だと言うではないか

フフフフフフフフ

今は束の間の平穏に酔いしれているが良いです。

「其では今度こそ仲間の所に貴方を紹介しに行きますよ、付いて来て下さい」

side out

はあく仲間ねえ…………

「ねえマスター、マスターの仲間ってどんな人達なの？」

僕がそう質問するとマスターは歩みを止め

「そうですね……………会う前に簡単に説明しときますか」

「お願いします」

「先ずはは私達の団体名から教えましょう……………」

20分後

す…すげえ

紅き翼のリーダーナギさんにそんな秘密があったとは……………

……………

何でも亡くなられた妹さんの敵を探しているみたいです

どんな奴なのかマスターに聞いてみたらマスター曰く、

『その御人は雲を突き抜けるような大男で、全身は緑色の鋼の鱗におおわれており、縦に割れた瞳孔からは常に怪光線、その体軀に不釣り合いな春風のような歌声とハーブティーの香りで旅人を誘い出し丸飲みにしてしまうとても恐ろしい御人です』

紅き翼はそんな化け物を捜しながら、戦争で困っている人達を救助しているらしい

僕は興奮しながら

「『紅き翼』の人達ってとても凄い人達なんですね！」

「はい、とても凄い人達ですよ、でも今日から貴方も『紅き翼』の一員になるんですから……………」

ええ……………

僕が『紅き翼』に入るだなんて……………

ついて行けるだろうか……………、いやあの神様から貰った召喚術のスキルが有れば大丈夫な筈であるそれに不老不死のスキルもある大丈夫だ、大丈夫だと思う、大丈夫だといいなと弱気な心で考えていたら

「それでは皆の所に行きましょう」

そう言われ僕は力強く答えたのでした

「はい、行きましょう皆さんの所へ！」

眠獣です。

携帯投稿なので親指が凄く痛いです。

他の携帯投稿の方は尊敬に値します。

未だアルビレオとナギしか出てきてないorz

ナギに至ってはたった数行だけ

主人公設定

主人公設定

名前：カイト（如月 海斗）

愛称：カイ

年齢：約532歳

誕生日：7月24日

身長：152cm

（マスターの気分次第で変更可能）

体重：39kg

（マスターの気分次第で変更可能）

性別：自称男

（説得の末何とか男の象徴を勝ち取ったがマスターの気分次第では女になる事も可能である）

性格

前世では特に特筆すべき点はなく何処にでもいるような一般人であった、

頭ではいろいろ考えているが結局は自分の意見が言えず周りの意見に流されがちである

今現在の容姿

黒い髪の毛は腰まで伸ばしていて少しウェーブがかかっている、
瞳は青色で二重瞼、

服装は赤と黒のチェックのポロシャツに青いネクタイをしめ黒のハ
ーフズボンを履いた男の娘である

能力表

体力：B+

魔力：――（ゼロ）

気力：――（ゼロ）

筋力：D+

耐久力：B――

俊敏力：E+

幸運力：C

スキル

召喚術（EX）

主人公を主人公足らしめるチートスキル、このスキルを持つ事であ
らゆる召喚術を使う事が出来る

契約者も使う事は可能だが主人公に魔力供給をして召喚した方が負
担は少ない

魔力増幅（EX）

契約者から送られてきた魔力を約3倍にまで増やす事が可能

此れが主人公に召喚させた方が楽な理由

魔力返還（C）

魔力増幅で増やした魔力を契約者に送り返す事が可能、
ただし送り返している時は動けないし力行使する事も出来ないの
でかなり無防備になる

高速召喚（A）

此れが有ればなかつたらしい詠唱をしなくても名前を呼ぶだけで召
喚ができる

神剣グラム偽（A+）

本物ではなくレプリカ

刃渡り40cmの両刃の片手剣

この剣で何かを切る事も可能だが本来の仕様用途は儀式剣である
この剣を使つて召喚術を使う時は魔力を7割カットしてくれる

蛇足

神剣グラムとは北欧神話に出てくる英雄ジークフリートの剣、バル
ムンクの別名であり、不死身のドラゴン、ファフニールの尾から産
まれたとされる伝説の剣である

第4話

僕は今『紅き翼』の人達と対面している

「フフフ、皆さん揃ってますねそれでは紹介します、彼が私の新しい従者です」

「初めましてこの度マスターの従者を勤める事になったカイトといいます」

「俺は紅き翼のリーダー、世界最強の魔法使いナギ・スプリングフィールド様だ、気軽にナギと呼んでくれ」

「青山詠春だ、よろしく」

「ゼクトじゃ、一応ナギというバカの師匠をしておる」

「俺様は伝説の傭兵剣士ジャック・ラカン様だ」

「…………ガトウ・カグラ・ヴァンデンバークという」

「フフフ、此れで一通りの自己紹介が終わりましたね」

その時、ジャックさんとナギさんが目配せをしてから

「おい！カイト俺と勝負しろ！！」

急にジャックさんがそんな事をいいはじめた、

ええ、なんで？どうして？……ってそうか！

「そうですよね新しく仲間になるんですからどのくらい戦えるのか解らないと困りますもんね」

S i d e

アルビレオ・イマ

「おい！カイト俺と勝負しろ！！」

全くあのバカとバグは直ぐに勝負を仕掛けるのですから少しは自重を覚えた方がいいんじゃないのでしょうか？

まあ今さらですけど………そうだらカンにはナギと同じようにカイトにある事ない事吹き込みましょう、

あの子は簡単に信じてしまいますからね面白い事になるでしょう

それにナギの方はもう吹き込みましたから今回はいい事にしましょう
それよりも今は、

「カイト、貴方の強さをこの戦いで見せて下さい」

S i d e

o u t

「カイト貴方の強さをこの戦いで見せて下さい」

マスターにそう言われたんだ俄然やる気が出てきた
僕はやるぞ～～～

「しっかり観てて下さいね、マスター」

空き地

僕は神剣グラムを顕現させて戦闘体制に入る、といっても型も何も
ない出鱈目な構えだ

対してジャックさんは手をぶらぶらさせ首をポキポキ鳴らしている

……………

そう鳴らしているだけの筈なのに物凄い威圧感がある

そして僕はそんな威圧感に耐えられずに動き出した

僕は後方に退がりながら神剣グラムに魔力を送り召喚術を唱える

「召喚^{コール}蒼武天スサ「ラカン最速パンチ」ぐはあ」

僕は何がおきたのかよくわからなかった
それぐらい圧倒的であつた

だがしかしひとつだけ解る事があるジャックさんはやってはいけな
い事をしてしまったそれは……………

「変身中と召喚中と決めポーズをとっている時は攻撃しないのがお
約束だあ——」

Side アルビレオ・イマ

今だ両者は向かい合ったまま動いていません
まあラカンは手や首をぶらぶらさせていますが全力で殺気を飛ばしています
どちらかというときカイトが動けないというのが正解でしょうか？
この次点で気絶したり戦意喪失してないのは良いことですと考えていたら

「召喚蒼武天 スサ「ラカン最速パンチ」ぐはあ」

あらあら一撃ですか……………

いえ立ち上がりましたね、何か叫んでるみたいです

「変身中と召喚中と決めポーズをとっている時は攻撃しないのがお約束だあー」

「……………はあ？」「……………」

私やラカン、ナギ、ゼクト、ガトウが口を開けたまま固まっています

開いた口が塞がらないというのはこの事を謂うんですね……………
だけど只ひとり詠春だけがしきりに頷いていました
詠春には理解が出来たみたいですね

Side out

立ち上がりながら叫んでいるとほぼ皆が口を開けたまま固まっていた
僕はこの隙を見逃さずに召喚術を行使する

「^{コール}召喚金剛羅

百鉄鬼！！」

「怨おおおおおお〜んっ！」

そう雄叫びを咆哮ながら出てきたのは全長4mの鬼神だった
全身を紫色の鎧で覆い、右手には身の丈程の斬魔刀を持っている

「全ては我が主の為に！！殺アアアアア」

そう叫びながらジャックさんに斬りかかって行った
ジャックさんはやっと正気に戻ったのか

「ラカン気合いカウンター！」

といって百鉄鬼の斬魔刀を真正面から片手で受けながしなからもう
片方の手で百鉄鬼の胸を貫いていた

「ええ〜〜そんなバカな！魔神クラスの鬼たぞ、しかも本気の一
撃なのに」

と僕は膝をついてしまった

Side アルビレオ・イマ

「召喚^{コール}金剛羅

百鉄鬼!!」

……………はっ

そうでした今は勝負の途中でした

「怨おおおおおおお~~~~んっ!」

あれは東洋の鬼人……………いえ鬼神ですね中の下くらいでしょうか

「全ては我が主の為に!!殺アアアアア」

鬼神の百鉄鬼でしたか、その百鉄鬼がラカンに斬りかかりに行きま
したね

素晴らしい一撃ですね文句のつけようがありません

ただしそれは悪まで普通の人に対してのものであってバグキャラに
は通じないのですよ

「ええ~~~~そんなバカな!魔神クラスの鬼たぞ、しかも本気の
一撃なのに」

そう言いながら膝をついてしまいました

どうやらここまでみたいですね

今の彼個人の戦力は高位魔法使いに毛がはえた程度ですが、彼が召
喚する者によつてはかなりの戦力になる筈です

他の皆に目を合わせると同じ考えなのかしきりに笑顔を浮かべています

本当にこれからが楽しみです

眠獣です。

主人公負けちゃいました。

というか誰が相手でも紅き翼のメンバーに勝てる気がしません
ちなみに主人公は悪まで喚ぶ者であって戦う者ではありません、
だからどんなに努力をしようが二流留まりです、そのかわり召喚術
では右にでる者が居ないくらい行使出来ます

戦力としては

主人公〓二流以上一流以下

召喚獣達〓最強種

紅き翼のメンバー〓チートキャラ

という感じです

これからもよろしくお願いいたします。

第5話

カイトです。

あの試合のあとジャックさんから名前の方で呼ぶように言われました。

新しく仲間になるんだから他人行儀は良くないとの事です

そういえばマスターがもう少ししたらグレートⅡブリッジ奪還作戦を開始すると言っていました。

何でも大きな戦争に成るみたいです

要するにマスター達が遺跡に潜った理由は、マジックアイテムなどで戦力補強が狙いだっみたいです。

そういう意味でなら僕は十分な戦力になるらしいので足を引っ張らない様に気を付けなければいけません。

そしてついにやってきましたグレートⅡブリッジ奪還作戦
ここまでくるのにいろいろありました。

タカミチが仲間になったり、僕に二つ名が付いたり、

ちなみに二つ名は『邪流』です。

邪流のカイト

なんでも、『邪』をもって『悪』を滅ぼすからだそうです

全くもって不愉快です、僕の使役する鬼神や獣神、龍神を『邪』と呼ぶだなんて……………

其よりも今は目の前に敵が迫ってきています

「なにこれ、敵が多すぎて向こう側の地面がみえないよ」

「本当ですね、思ったより敵が多いみたいです、どうしますかナギ？」

そんなマスターの質問にナギさんは不敵に微笑みながら

「そんなの決まっているだろう！真正面からぶっ飛ばすんだよ！」

その言葉を合図に各々が敵を撃破しに行きました。

ちなみに僕は黒龍王と白龍王を召喚し空から一方的に攻撃しています、僕自身は何もしていないので黒龍王の背中からこれからの事を考える事にしました

【ナギさんは確かネギ君のお父さんだったはず……という事はこの大戦が終わってからネギ君が生まれるのか？相手が誰かは解らないが苦労するんだろうな〜なんせナギが相手なんだし】

（カイトはネギまを9巻までしか読んでいません）

「グオオオオオオオッ！」

つと今ので最後の一人を倒したみたいだ、僕は『お疲れ様』という気持ちのをせ黒龍王と白龍王を送還する。
さてと紅き翼の所に戻るか！

最近はタカミチと一緒に修行をしている

今では下位の召喚獣となら五感の共有が出来るようになった

これだけを聞けば良いことだらけに思えるが実際には痛覚も共有しているのあまり戦闘で多用できない使えても潜入捜査くらいだと思っ、

それでもできないよりはましだから修行を続けようとしたらマスターが

「二人ともここに居ましたか、なにやらガトウが敵の情報を手に入れたので話すそうです、修行を切り挙げてこちらに来てください」

僕はタカミチと目を合わせて頷いてから

「はいマスター、直ぐに行きます」

ガトウ説明中

ええ〜と簡単に纏めると何でもこの戦争に黒幕がいてその黒幕の名前が『完全なる世界』だそうです

それから本国のほうに行ってほしいみたいです、何でも協力者が居るので会ってくれとの事らしい

とりあえず今から本国の方に行くことになった

そして本国に来てから

「……………はぁ……………」

「どうかしましたかカイト？溜め息などをついて」

「いえ……僕がマスターと契約をしてからここまでくる間色々あったなと想いまして」

「そうですね……色々ありましたね……………」

と僕とマスターが話していたらナギさんが

「お前らなに熟成した夫婦のような会話をしてんだよ」

と呆れながら突っ込みを入れられた

「そんな事より、例の紹介したい人が居るからついて来てくれ」

そんな事を話ながら皆がガトウさんの後について行くと目の前におじさんがいた

「マクギル元老議員！！？」

マクギル元老議員？

誰それ？

「いや、わしちゃう主賓はあちらのお方じゃ」

そう言われたのでマクギルさんの後ろの方を見るとローブを被った女性が居た

「ウェスペルタイア王国……………アリカ姫」

へえ

あの綺麗な女性がお姫様なんだ、

あつ……ラカンさんがお姫様に話し掛けに行つた

「気安く話し掛けるな、下衆が」

……………うわぁ…

綺麗な人なのに言葉使いが毒々しいな……

後でラカンさんを慰めにいこうと思ひ振り向くとナギさんの顔が真っ赤なトマトになっていた

マスターはそんなナギさんを見て、新しい玩具を見つけたような顔をしていた

マクギルさんの話によると彼女は戦争を終わらせる調停役となるはずだったのだが……………

力及ばずのため、僕達紅き翼を頼ってきたという事らしい
これに関してもガトウさんの調査で『完全なる世界』が関与しているという話です

何でも連合と帝国の両方にその関係者が潜んでいるそうです

その後、その組織のことを調べることとなり、ガトウさんとタカミチ、マスターとゼクトさんは主に調査の方を担当することになりました

ナギさんとラカンさんと詠春さんはバカンスを堪能しています

ちなみに僕は一人で召喚術を駆使し、派手に救助活動をしています
僕もマスターに付いていこうとしたらマスターが派手に救助活動をやって注目を集めてくれれば警戒の目がそちらに向き調査が楽になるそうです

とある激戦区域

Side 一般兵士

はつきりいつて この戦いは負け戦だった

敵国の兵から夜襲を受けてから始まったこの戦い、

隊長は一番最初に殺された、そのせいで統率が執れなくなり各個撃破されていつている

俺もここまでか、と諦めていたら後方から声が聞こえた

「召喚^{コール}——紅武天マルドウーク」

そこには深紅の蛇神と一人の王がいた、腰まである漆黒の髪を靡かせ蒼き瞳は全てを見透かしているかのようだった

深紅の蛇神が翼を広げている姿は夜空に生えてとても綺麗だった

「マルドウーク、毒砂の嵐……！」

「キシヤアアアアア——ッ！」

深紅の蛇神は口から毒液を吐き出し、それを翼が送り込む風で攪拌している

一瞬にして、濃密な毒霧が敵陣営を包み込んでいった。

ある程度耐性が有るものや防御魔法が間に合わなかった敵十数名が毒でのたうち回っていた。

然れど敵もただ殺られて要るわけではない、空中に浮かぶ蛇神に向かって魔法の射手を撃ち込む

だが蛇神の王は焦る事もなくただ一言

「マルドゥーク……！」

「キシヤアアアアア——ッ！」

蛇神の翼が乱気流をお越し、魔法の射手を逸らしていく

まさしく神であった、暴風と猛毒の神は空気を操るのである

後は一方的であった気がついたら生きて居るのは俺らだけで敵は一人も居なかった

まだ子供で彼女が解らなかったが、それでも助けられたのは事実なのだ本国に戻ったら、あの子供の事を調べてみよう……

眠獣です。

今更ながら召喚獣達の出所紹介です。

今の所は『ジュエルスオーシャン』だけですこれから増やすかどうかは未定です。

増やしたとしても後一つくらいかな

とこんなSSですがこれからもお付き合い願います。

閑話

このお話はラカンとの勝負が終わり暫く仲間として共に行動するようになってからのお話です。

ある日突然、ゼクトさんからこんな事を聞かれた

「なぜお主は紅き翼に入って戦おうと思ったのじゃ？断ろうとは思わなかったのか？」

……………そういえば何でだろう

「……………」

僕は答えられずにいた、そしたらゼクトさんは

「なら質問を変えよう、お主は何のために戦う？」

…それは……………もちろん…

「…………マスターの為に……………はつきりいつて僕は痛い嫌いだし、敵も怖い、けど同じ高さになきゃ支え合えないから、いくらでも無茶するし意地だつて張つてみせます、並みの敵を相手にしているんじゃないですから、とことん登って登って登りつめてみせます！-」

「…………その結果、お主が死ぬ事になってもか？」

「高笑いしながら逝ってやります」

暫く二人は見つめ合いどちらともなく気を緩めて笑いあったのでした

眠獣です。

すみません凄く短いです。今回は主人公の心の決意です。
こんなSSですがこれからもお付き合い願います。

第6話

カイトです。

マスターから『派手に尚且つ目立つ様に救助活動をしてください』と、お願いされてから約1カ月たちました。

そんな僕に二つ名が増えました。

『無銘の王』と、『無銘の華』

共通して謂えるのは『無銘』という部分、

僕が使役する召喚獣達は、このネギま世界で存在しない者達である、だから文献を調べようが解らない、故に『無銘』

『王』はそのまま、無銘の召喚獣達を束ねる者

『華』は不本意ながら僕の容姿からきているみたいだ、召喚獣達の中で舞う一輪の華……

でも最近は女の子に間違われても何とも想わなくなってきた…

始の頃はいちいち訂正していたが、途中から面倒になってきたから訂正しなくなっていたからなあ…

それに女の子に間違われた方が何かと得をする事が多い

………はっ………何故かマスターが高笑いをしながら、「計画通りです」と言っている姿が頭に浮かんだ

そんなある日、僕はいつも通りに救助活動をしていた。

「一気に決めるよ白龍王!!」

僕がそう言つと白龍王が

「ケエエエエ——ンッ！」

と雄叫びを挙げながら翼をはためかせ大空に舞って行く

「滅びの……（フレア オブ……）」

白龍王の口に光が集束していく、

その光の集束が頂点に達した時には眩し過ぎて白龍王を直視出来ないほどだった、

敵の方は護りを堅めようとする者、反撃しようとする者、逃げようとする者など全然統率が執れていなかった。
ただ僕は容赦なく最後の一言を紡ぐ

「カタストロフィ
…業火！」

その瞬間音が消えた……………

一瞬の閃光の後すざましい爆音、

「あつ……やり過ぎた……」

というかもう一種の核兵器である、

それでも紅き翼には通じないだろうなあ、というかまず射たせてくれない、十数秒間溜めを作らないといけないのでその間に殺られる僕自信がそこまで強くないので、後はなけ崩的に僕も殺られる、とそこまで思考に耽っているとマスターから念話が届いた……

【カイト、情報収集が終わりましたので、一度紅き翼の拠点に戻って下さい】

……一方向的な念話だった、返事をする事はもちろん相槌をうつ事すら出来なかった、なんか急いでいるみたいだったけど……………

とりあえず拠点に帰るか

Side アルビレオ・イマ

その頃拠点でアルビレオは、今月号のロリータ通信を読んでいた

「な…なんと…今月の葉書抽選では、『闇の福音』とお揃いのゴスロリ衣装を抽選で一名様にプレゼントだと……今すぐ葉書を買って送らなければなりませんね………」

あの子も最近男の娘として振る舞える様になってきましたからね、次のステップに進む事にしましょう。

フフフフフ……

Side out

帰って来ました我らが拠点に!!

取り敢えずマスターに情報収集の成果と今後の方針を聴きますか…

……

ええと何でもガトウさんとタカミチが『完全なる世界』の証拠を掴んで来たらしい

「これで戦争も終わる!!」

とタカミチが意気込んでいる、

取り敢えず明日、マクギル元老員にこの情報を渡しに行こうという事にまとまりました。

そして次の日

僕は今ホテルで読書を楽しんでいた、この世界には僕の知らない神話や童話が沢山有るのだ、本好きの僕としては正に天国である
因みにマスター達は今マクギル元老員の所に行っている

そしてまた一冊読み終わり本を積み上げる、既に5冊ほど読み終わっており6冊目に入ろうとしたその時、

外から大きな爆発音が聞こえてきました、急いで外に出ようとする
と大きな建物の崩れる音も聞こえてきます、
そしていざ部屋から出ようとする

「カイト！！ 此処から早急に逃げるぞ！」

ゼクトさんが慌てた様子で部屋に入ってきた、
急に逃げるぞ！と言われても状況が……………と思ってもいたら

【すみませんカイト連絡が遅れました、詳しい説明を省きますが
急にゼクトと共にこの首都から逃げて下さい、説明は後でしますの
で】

そうマスターから念話がきて、僕は脱出の準備に入ろうとすると

「そんな物はどうでもいい！！また向こうで買えばいいのじゃ！！」

ゼクトさんにそう言われたので何も持たずに首都から脱出する事に

……………
さようなら、『ロリータ通信』と大量の『葉書』と『切手』
よ……………

部屋を出ようとすると、兵士がゼクトの所に襲ってきた

「居たぞ！ 捕らえろ！」

数人の兵士がゼクトに向けて捕縛用結界展開弾が放たれるがゼクトはすいすいと避けていく。

……………えっ…僕はどうしたかって？

僕は一冊の魔導書に戻ってゼクトさんに運んで貰っている

この状況で僕は足手まといにしかないから……………

考えてて虚しくなってきた少しは防御魔法を覚えるか

そして何とか街から脱出に成功し、辺境を通って紅き翼拠点を目指します。

拠点を目指す途中で僕達は約20人位に囲まれてしまいました、待ち伏せされていたみたいです

「此処で会ったが百年目ってか！」

リーダーらしき人物が話し掛けてきた……………

山賊みたいな格好をしているが、かなり統率が執れているし訓練もしている様子だ、どうしたものか……………

と約10分前は悩んでいました、因みにゼクトさんは今隣で

「そんだけの人数でわしに勝負を挑むとはな、わしを捕まえたければその千倍は連れてこい！」

と豪語していた、さすがナギさんの御師匠である…

ていうか僕は何も出来なかった、はっきり言って奇襲は得意だが、奇襲されると凄く弱いのである

召喚する前にフルボツコである……

本気で防御魔法を覚えなければと思う今日この頃である
取り敢えず拠点に着くまでゼクトさんに教わろうと思う

眠獣です。

すみませんちよつと爆弾発言をします。

作者は『ネギま』を9巻迄しか読んでいません、後は他所様のSS
を読んで知った知識しか在りません
そんなSSですがこれからよろしく願いいたします。

第7話

カイトです。

ゼクトさんをお願いして教わった防御魔法、何とか形に成ってきました。

最初の頃は紙程度の壁でしたが、今では『雷の斧』を防げるようになりました。

属性は『重力』、マスターとお揃いです。

話が変わりますが、さきほどゼクトさんと共に紅き翼拠点にたどり着きました。

急いでマスターの所に向かいます。

マスターから詳しい事情を聴くには……………

何でも既にマクギル元老員が死亡していて『完全なる世界』の者に入れ替わっていたみたいです。

途中で入れ替わっている事に気がついたのはよかったのですが、罠に嵌められてお尋ね者になってしまった、という事らしいです……………此れからの行動は取り敢えず、『夜の迷宮』にアリカ姫様が囚われているので救出してから考える事に決まりました。

その後、マスターにロリータ通信と大量の葉書と切手を持って逃げる事が出来なかった事を伝えると

……………つつ…

と呻きながら片膝を着いて

「私の命運も……………ここまで……………です……………か……………」

と言いながらうつ伏せに倒れてしまいました。

そんなマスターに一人だけ駆け寄る人がいます……
その名は青山詠春です

「しっかりするんだアル！！だから言ったじゃないか読書用だけではなく、保存用も買っておけと……」

何なんだろうこの三文芝居は……

取り敢えず周りに助けを求めようとしたら全員に目を逸らされ、小屋の中に逃げて行った

本当に何なんだろうね……僕達は犯罪者で追われる身になった筈なのに……

……マスターには悪いけど僕も小屋に戻って明日の為に準備をしよう……

翌日

やって来ました『夜の迷宮』に、此所の地下牢にアリカ姫が閉じ込められているそうです。

というかなギさんが今か今かとタイミングを図っています
見ている微笑ましいですね、少しでも早く助けに行きたいようです
因みにラカンさんと僕が表に残り、他の人達が潜入する事になりました

はつきり言って僕は今気分が高揚しています。

今まで『受け』の戦闘ばかりだったのでほとんどか守られてばかり

でした。

だけど今回は『攻め』の戦いです、久しぶりに暴れられると召喚獣達も言っています。

……………フフフ……………

今日はどの子で戦おうかな……………

つと気を取り直して、どうやら今からナギさん達が潜入するみたいですよ、

僕はラカンさんと目を合わせて頷き合い、

「いっちょ派手に暴れるか!!」

「ええ…！派手に暴れましょう！」

そう言つて僕は召喚術を唱え始める

「捻り潰せ……………！召喚^{コール} 蒼武天スサノオ」

「グオオオオオオオオオツ！」

其処には筋骨隆々の蒼き猛牛が鼓膜を破らんばかりに雄叫びを上げていた

「うおおおおおおおっ！」

そこへ生粋の戦士であろう男が、重さ1トンは在りそうな大きな斧を振り回し、雄叫びを上げながらこちらに突っ込んで来ている
その見るからに強敵を前に、スサノオはただ単純に拳をブン回す！
只それだけでその生粋の戦士であろう男は戦闘不能になったのだ

「それならば召喚者を倒すだけだ……………！白き雷!!」

スサノオに敵わぬならと、今度は魔法で召喚者を撃破しにくる、

「グルルルルルウ〜〜ッ！」

蒼き猛牛はカイトを守る様に仁王立ちし、その立派な大角の間でバチリと電撃をスパークさせた。

次の瞬間には……閃光！

雷の雨が降り注いだと理解した時には魔法使いは黒焦げに成っていた。

そしてそんなカイトとスサノオを見て誰かが呟いた……

「あいつ……『無銘の王』……じゃないのか？」

「確かに……あの容姿と召喚獣は噂通りだが……」

「何でこんな所に居るんだよ……！」

「俺が知るわけ無いだろう……！」

「カイトたん……、ハアハア……ぐえっ……！」

何かいろいろ言われています……、取り敢えず最後の奴はスサノオが殴り飛ばしました。
するとナギさんが念話で

【姫さんは俺が無事に助け出した、とつとこんな所からおさらばして紅き翼の拠点に帰るぞ！】

そう伝えてきたので僕は迅速にラカンさんの所に行き一緒に転移させてもらう

そして転移した先はタルシス大陸極西部のオリンポス山にある隠れ家である。

「これが噂の紅き翼の秘密基地か！どんなところかと思えば掘建小屋ではないか！！」

ちよつと腹が立ってきた……

何処の誰か解らない子が、僕達紅き翼の隠れ家をバカにしているのだ……

確かにちよつと汚いけど……

「俺ら逃亡者に何期待してんだこのジャリが」

ラカンさんがその子に何を言っただ、という感じで喋っている……いいぞ！もつと言え！！

心の中でラカンさんを応援する

「むっ 無礼者わらわをだれじゃと思っておる」

「へっ……ヘラスの皇族には貸しはあっても借りは無いんでね」

………はああ！！

ヘラスの……皇族？

あの子が？

ラカンさんが今ベロベロバーとからかっているあの子が？

「なんじゃと貴様何者じゃ」

「俺様は伝説の傭兵剣士ジャック・ラカン様だ」

「なっ、貴様が千の刃だと……………こんな馬鹿が……………」

「んだとこのガキが」

「何だと貴様無礼であろう！それに貴様は中身がガキではないか！
」

「へっへ〜ん、生憎ヘラスの皇族にや貸しはあっても借りはないんでね」

あゝラカンさん捨て台詞を吐きながら皇女様から逃げて行ったよ…

……………

「むう〜、それにわらわはガキではない！わらわにはテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアという名があるのじゃ
！！」

ラカンさんが逃げたせいで皇女様はなんだか行き場の無い怒りの捌け口を探しているみたいだ……………

目を合わせない様にしなければ……………

ついでだからマスターに『夜の迷宮』の中で何が有ったのか聴いておく事に仕様かな……………

何でも皇女様はアリカ姫との会談の際に共に捕まり幽閉されていたそうだが、ナギさん達が助けに行った際についてに助けた……………という事らしい

「おいっ……………そこのお主、名は何という？」

……あれ？何故か皇女様の機嫌が治っている………ってよく見ると皇女様の後方に燃え尽きたタカミチが居た、僕とマスターが話している間に何が有ったのだろうか？

「聞いておるのか…？わらわが名を尋ねておるのじゃぞ！」

ヤバイ……！！！！ここで皇女様の機嫌を損ねたらタカミチの二の舞だ！！

「僕の名はカイトと申します、皇女様！」

「……ほう！するとお主が噂の『無銘の華』なのか
！」

そう言つて皇女様は僕を値踏みするかの様に、下から上へと視線をずらしていく……

「実力の程は解らぬが、確かに噂と違わぬ容姿の持ち主みたいじゃないの？」

…アハ…アハハ…アハハハハ…

（因みに今の服装はカジュアルにマスターが仕立ててくれたりする。

何故旧世界の服が有るかというと、すべて『ロリータ通信』の葉書応募で当てた物である）

本当に笑うしかこの状況を切り抜ける方法が解らない、誰でも良いから助けて！！

そんな風に想っていたらナギさんとアリカ姫が

「さーて姫さん……助けてやったはいいいけどこっからは大変だぜ、連合にも、帝国にも、勿論あんたの国にも味方はいねえ」

……状況から判断するに、かなり最悪に近い状況であることが解るアリカ姫も、やはりなという感じである

「……………我が騎士よ」

「だからその『我が騎士』って何だよ！それに姫さん俺はクラスでいったら魔法使いだぜ？」

「もう連合の兵ではないのじゃろっ、ならばお主はもはや私の物じや」

「なッ……」

うわぁ……………

大胆な発言です

僕はマスターの方を見てから念話で

【これって……捉えように選つては、一種のプロポーズすよね？】

【そうですね……これはもう一種のプロポーズですね】

「帝国に、連合、そして我がオスティア世界すべてが我らの敵という訳じゃな」

……うわぁ……

何か軽く目眩がしてきた

「じゃが……主と主の『紅き翼』は無敵なのじゃろ？」

アリカ姫が挑発的な笑みを浮かべて言っている

「世界すべてが敵……良いではないか、こちらの兵はたった8人だが最強の8人じゃ」

ふうん……そこまで紅き翼を……いやナギさんを頼りにしているんだ……

まあ……僕はマスターに付いて行くだけである……最後まで付き合うかはマスター次第……

「ならば我々が世界を救おう我が騎士ナギよ、我が盾となり剣となれ！」

「……へっ、やれやれ相変わらずおっかねえ姫さんだぜ、いいぜ俺の杖と翼あんたに預けよう」

ナギはアリカ姫に騎士の誓いを立てたのであった

眠獣です。

続きがわからない……

というか意地でも単行本を読まない自分がある……

だから他所様のSSをはしごしまくって調べています。

そんな眠獣ですがこれからもうよろしくお願いいたします。

第8話

カイトです。

今何故か解りませんが皇女様とテーブルを挟んでお茶を飲みながら向き合っています

「……………」

「……………」

物凄く気まずいです。

お茶を飲む音とカップとお皿が擦れる音しかしません、初対面があれだけただけにお互い会話がでてこないです、

「ええと……………皇女さ「テオドラ」…ま？」

「そう呼ばれるのはあまり好きではない、ここでは名で呼べ様もらん」

はあ……………それじゃ

「テオドラ紅茶のおかわりいますか？」

そんな僕の質問にテオドラは

「うむ、もらおう」

笑みを浮かべながら答えてくれたのでした

そんなこんなで始まった新たな戦い
まずは肉体労働組と頭脳労働組にわかれ、頭脳労働組が集めた情報をもとに敵だと判断したら肉体労働組が潰していく

単純だが効果的である、

今回僕は頭脳労働組に回された

僕が使役する者の中には『蜘蛛神レディスパイド』という蜘蛛神がいる、雌の大土蜘蛛で小蜘蛛を沢山飼っている、その小蜘蛛を使って情報収集するつもりだ。

他にも僕は頭脳労働組の護衛も兼ねている

因みにマスター達は情報収集だけではなく、僕達紅き翼に協力してくれる所も探しているみたいです。

あれから3ヶ月後

只今隠れ家の中で会議をしています。

「アリカ姫とテオドラの説得によりアリアドネーは味方になってくれることになった。」

基本的に会議はガトウさんとアリカ姫が中心になって会議は進みます、テオドラによる説明、マスターと詠春さんによる作戦説明という順に……

因みに僕は集めた情報を全てマスターとガトウさんに渡していますので聞き手に回っています。

ナギさんやラカンさんも聞き手です。

「あそこの騎士団はなかなか強いから味方になってくれるのはありがたい」

アリアドネーという都市はは世界最大の独立学術都市国家で、どんな権力にも屈せず例え犯罪者であろうとも学ぼうとする意志と意欲があれば入学出来る所です。

「でも帝国と連合の方は厳しいんだよな……そうだろ？ガトウにデオドラ」

ナギさんが疑問点をぶつける…

「昔からの知り合いと、そのツテをたどってるんだが………」

「わらわもお父様は信じてくれたのじゃが議会や官僚が信じてくれないのじゃ、人によってはわらわ達を捕えようとしてくるのじゃ………」

アリカ姫とデオドラが言い淀む

デオドラの時は僕も護衛で付いて行った、あの時は久しぶりにスーツを着たので良く覚えています。（カイトは気づいていないがレディスーツである）

確かに一個大隊を連れてきた奴らもいた。

ただど城の上空に白龍王を喚んでいたので逃げる事は想ったより簡単でした。

「アルは『完全なる世界』の情報手に入ったか？」

「いいえ……手に入っただとしても下部組織の情報ばかりでとてもじ

やないですけど決定的なものはありません……ナギ達にはこのあと何個か潰していただきたい所があります」

「では頭脳労働組はこれまでどうりに情報収集、肉体労働組は敵とわかったこの紙に書いてある組織とそのアジトの破壊をお願いする。」

アリカ姫が締め括って会議は終了である。

皆がまた想い想いに行動を開始する中で僕とテオドラだけが残った

「カイト……喉が渴いたお茶をくれ」

「うん……解ったすぐ準備する」

そう言つて僕は、テオドラの前にカップやポットを音もなく並べる、その間に十分蒸らした紅茶をカップにそつと注いで、テオドラのために角砂糖を一つ落とし、ピッチャーからミルクを注いだ。

それを黙つて見ていたテオドラは自らスプーンを手にとつて紅茶をゆるくかきまぜ、香りを楽しんでから一口飲み込んだ。

「ふむ……、上手になつたのカイトよ」

「ありがとうございます」

僕は心の中でガッツポーズをとる、テオドラは3ヶ月前に僕が入れた渋い紅茶を、あれが如何に酷い代物だったかを皆に話のであるそれを聞いてなのかマスターが正しい紅茶の入れ方を教えてくれたのです。

因みに教えて貰っている間はメイド服を着させられました。

そのお陰で今回のリベンジは成功しましたが僕の中で大切な何かが音を起てながら崩れて逝きました。

そこからさらに3ヶ月後

ついに『完全なる世界』を世界最古の都王都オステイア空中王宮最奥の『墓守り人の宮殿』に追い込みました。

何でも『黄昏の姫御子』と呼ばれる子を利用して世界を滅ぼす積りらしいです。

そして今、『紅き翼』、『連合』、『帝国』、『アリアドネー』と『完全なる世界』との最終決戦が始まるうとしていいます……

今回僕は表に残らず、マスター達と共に『墓守り人の宮殿』内部に潜入する事にしました。

「不気味なくらいに静かだな……奴ら」

「なめてんだろう、悪の組織なんてそんなもんだ」

突入前の物々しい空気にナギさんとジャックさんの声が響きます。

僕達は『墓守り人の宮殿』を見ながらその時を待っていた。

そういえば、ゼクトさんはテオドラに髪を切られたそうです、随分すっきりとした髪型になってます。

僕の方は切られる事は無かったですが、髪の毛を沢山弄られました。お団子にしたり、三編みにしたり、お嬢様カールなど色々な髪型にされました、しかも途中からアリカ姫も参戦してくる始末………
つと脱線し過ぎました。

そしてピリピリとしたこんな空気の中、総長のセラスさんが準備完了の報告にやってきました。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊準備完了しました」

「おう！あんたらが外の自動人形や悪魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入できる、頼んだぜ！」

「ハイ！それであの……………ナギ殿！」

「ん？」

「…サ…サインを頂けないでしょうか」

かなりもっています。

「いいぜそんなくらい……………ほい」

この人ナギさんの大ファンみたいだからサイン貰って嬉しそうだ。

「よろしければ、カイト殿もサインを頂けますますでしょうか？」

「……………えっ…僕のサイン？」

つい、質問に質問で返してしまった

「はいっ！……………実は娘がカイト殿の大ファンでして……………」

ふうん…僕のファンだなんて変わった娘さんだな……………（実はカイト子供達に大人気です）

「えーと、親愛なる情を込めて……………カイトより…と、はいどうぞ」

「御二人共、ありがとうございます。」

そしてそんな事をしている間に、ガトウさんからの通信が入る。

『連合の正規軍の説得は間に合わん、帝国の方も同じだろう。……
…決戦を遅らせることはできないのか?』

この場の軍勢だけでやるしかないのか……
そんな雰囲気漂っている……

全く元老院の頭の堅い人達は……、帝国は皇帝が了承しているのに官僚の人達のせいで動けないのである。

「無理ですね……私達でやるしかないようです」

「既にタイムリミットだ」

マスターと詠春の言う通りです。

「彼らはもう『世界を無に帰す儀式』を始めています、世界の鍵『黄昏の姫御子』は彼らの手にあるのですから。」

姫巫女さまが囚われてから時間がかなり過ぎています、そして皆がナギさんの号令を待っています。

「よし……、なら行くぜ！野郎共！！」

「おおっ！！」

とラカンさんが言い、

「はい！」

と詠春が答え、

「ええ！」

とマスターが返事をし、

「うむ！」

とゼクトさんが相槌をうつ、……………

何故だろう、こんな時くらい返事を合わせればいいのに……………

とそう想いつつも僕は返事すらしてないけどね……………

この先本当に大丈夫でしょうか、ちょっと不安なってきました……………

眠獣です。

気が付いたら二万PV突破していました。

皆様こんな駄文を読んで頂きどうもありがとうございます。
よろしければこれからもお付き合いのほどお願い致します。

第9話

カイトです。

今僕達は詠春さんを前衛に置いて『墓守り人の宮殿』内部に進入しています。

因みに僕は『紅武天　マルドゥーク』の背に乗り中衛を務めています。

そしてしばらく進み続けていたら、……………見つけました！

あの特徴的な白髪の青年——フェイト・アーウェルンクス！

彼らの前に降り立った僕達に、フェイト・アーウェルンクスは挑発的な言葉を掛けてきました。

「やあ、『千の呪文の男』また会ったね、これで何度目だい？僕達もこの半年で随分と数を減らされてしまったよ」

「はっ！世界を滅ぼそうとするやつに遠慮はいらねえだろう！」

「…………ふん、まあいいこの辺りで決着をつけようじゃないか」

「ああ…………！望むところだ……！」

ナギさんがフェイト・アーウェルンクスに、詠春さんが雷をつかう人に、ラカンさんが炎をつかう人に、ゼクトさんが水をつかう人に、マスターと僕が召喚魔法の人と戦うことになりました。

Side アルビレオ・イマ

「マルドゥーク！不可視の炎！！」

カイトが蛇神に指示を出し、その蛇神の口から何かが吐き出されま
した……

敵は影魔法を使い回避をしましたが、先程まで床だった物がドロド
ロに溶けて無くなっています。

多分あの蛇神が吐き出したものは『高濃度の腐食性の毒』だと思い
ます。

敵もその正体に気がついたらしく影魔法と召喚魔獣を駆使しながら
カイトだけを攻めに行きました……

確かに予備動作無しであの威力は驚異ですが……

「私をフリーにするとは……少し甘く見すぎですよ……！」

私は遅延魔法で溜めていた重力魔法を解き放ちました。

Side out

ふう……

最後はヒヤッとしましたが何とか勝てました。

「皆が心配ですので様子を見に行きましょう」

「はい、マスター」

皆と合流すると多少の怪我はしているようですが勝ったみたいです。

そして皆で外に行くとナギさんがフェイト・アーウェルンクスの首を掴んで持ち上げながら何か話しているようです。そして、フェイト・アーウェルンクスが歪な笑みを見せた瞬間、ナギさんのお腹には魔法が突き刺さっていました。

「いかんっ！」

ゼクトさんはいち早くこの状況を理解したのかナギさんのいる所に
クリティカル・アイギス
『最強防護』を展開していました…

ドッオオオン！！
パキイイン

盾は一瞬で壊れたとはいえ、時間を作ってくれました。そのお陰で皆が状況を理解して守りの体勢に入ります。そんな中で、僕も防御魔法を唱えますが………

パリイン！

一秒も持ちませんでした、そして目の前にはもう敵の攻撃が迫ってきています。

…はは………死ぬほど痛いんだろうな……

僕は目を瞑って来るべき衝撃を待ちます。

………あれ………何も来ない………？

僕は恐る恐る目を開けると、そこにはマスターが僕を庇うように立っていました。

そんなマスターが話しかけてきました。

「まったく……そうやって直ぐ諦めるのは貴方の悪い癖ですよ……」

無理に僕を庇ったせいかかなり辛そうです。

良く見ると額からは大量に血を流し、右腕は不自然な方に曲がっています、先程の声を聞くに肺も殺られているかもしれません。

パキイイン！

そして、やはりそんな傷だらけのマスターの防御魔法では耐えられなかったのか、防御魔法を突き抜け敵の攻撃がマスターに直撃しました。

崩れるようにマスターが倒れていきます。

そして敵の方は、これで止めだと謂わんばかりの一撃を放ってきました。

このままではマスターも僕も殺られてしまいます。
そんな中で僕は……

——どうする？——

——どうしよう——

——どうしたい？——

——戦う？——

——それとも……——

——諦めて逃げる？——

「……ありえない!!」

そんな心の問いに僕は叫びながらマスターの前に立っていました。僕は神剣グラムを顕現させて残りの全魔力を注ぎ込み防御魔法を展開します、敵の攻撃が僕の防御魔法に接触しました……、

3秒程経ったでしょうか先程よりは長持ちしていますが既に僕の防御魔法は所々輝だらけになっています。パライイイン

「ぐあ………!!」

僕の防御魔法が破られてしまいました、だけど僕の後ろには傷付き倒れたマスターがいます。

「後には引けないですよ!!」

僕はそう叫びながら身体を盾にして、マスターを守るように気合を入れました。

そしてまず最初に左腕が無くなりました、次に右足が、その次に右手が、最後に下半身の感覚が無くなりました、これで敵の攻撃が止んだようです。

僕は最後の力を振り絞りマスターの無事を確認します、丁度今気が付いたらしく目が合いました。

「……マス……ター……？よか……っ……た……」

意識を手放したのはその直後でした……………

Side アルビレオ・イマ

「……………つう……………」

右腕と肋骨が折れていますね、肋骨も何本か肺の方に刺さっているようです。

そういえば何で私は……………

……………ってこんな所で寝ている場合ではありません。

私は急いで上半身を起こします、いったいカイトはどうなったので……………

「……………マス……………ター……………？よか……………つ……………た……………」

カイトはうつ伏せに倒れていて、そう言いながら瞼を閉じていきました。

——これは……………なんだ……………一体何が——

——どうして……………どうして……………？——

——死ぬ？……………死んだ？——

——カイトが？……………まさか——

「ハッ……………ハハッ……………なんの……………冗談……………です？」

私はふらつきながらもカイトに近づきます。
私がカイトの頬に触れると、

「……………アア……」

まだ息があります!!
カイトはまだ生きています。

「今……………治癒魔法……………を……………えつ……………?」

生きていたのが不思議な程の傷でした
それがほぼ一瞬のうちに跡形もなく治癒されていきました
カイト自身が無意識のうちに治した?

魔法を使つて?

違います……………

勝手に修復されたんじゃないのでしょうか?

自分の意志とは関わりなく……………勝手に……………自動的に……………もしそうだとしたら……………

S i d e o u t

眠獣です。

ヤバイ……………

アルビレオがアルビレオじゃない

なんだかどんどんキャラ崩壊が起きていつています。誰かタスケテ

ー（笑）

それとこれからもこのSSをよろしくお願いいたします。

第10話

S i d e アルビレオ・イマ

それは突然でした。

いきなりカイトの身体が淡い光を発しながら、光の粒子となり消えていっていきます。

私の手からすり抜ける光の粒子がカイト自身の様な気がして、消えていく光の粒子に必死に手を伸ばしますが全て私の手からすり抜けていき、そして光の粒子が全て無くなった時には、一冊の見馴れた魔導書が私の腕の中にあるだけでした。

「待てコラてめえっ！！！」

造物者に向かってラカンの怒声が鳴り響きます。

「俺に任せな、ジャック！」

先程まで倒れていたはずのナギが起き上がっていました。

体中から血を流し、フラフラになりながらも目に希望と怒りを宿したナギが。

「アル！お前の残りの全魔力で俺の傷を治せ！」

今の私に異論を唱える気は有りません。

「30分もてば充分だ!!」

「無茶ですよ!いくら貴方でも……」

詠春が異論を唱えますが、ナギにそれを遮られ全員を見渡しながら

「お前らは悔しく無いのか!カイトが殺られたんだぞ!!」

皆一様に悔しそうな顔をしています。

……あれ……?

いつの間にかカイトが死んだ事になっているようです。

確かにカイトは光の粒子となり消えていきましたが、死んだ訳ではありません、その証拠に魔導書からカイトの気配が伝わって来ますし、何よりもカイトとの魔力によるラインが切れていません。

ただど私は、

「ナギ……お願いします、私の代わりに……奴に報復を……!」

私はそう言いながらナギに治癒魔法をかけます。

ここで敢えて仇と言わないのが味噌です

「ふふ、よかろう……ワシもいくぞナギそれにアル、ワシが一番傷も浅いからのう」

「お師匠!……よし、行こう!!」

そう言いながらナギとゼクトは造物者ライフメーカーに最後の勝負を仕掛に行きま

した。

……フフフフフ

カイトはやはり私のパートナーです。

まさかこんなサプライズを残してくれるだなんて……

あとで蘇ったカイトを見てナギ達がびっくりするのを見るのが楽しみですね。

S i d e o u t

カイトです。

今僕は暗闇の中を歩いています。

僕が目覚めると既に此所にいました、何故？という疑問も有りましたが取り敢えず移動する事に決めました。

「……はあ、一体ここはどこなんだろう？」

早くマスターの所に帰らなければいけないというのに……

……オオオオオオ……

何でしょうか奥の方から声が聞こえてきます。
行ってみるべきでしょうか？

僕は数分悩んでから行くことに決めました。

……ウオオオオオオオ……

段々近づくにつれ声が大きくなっていきます。

何と謂うんでしょうか……声が化け物みたいに聞こえます。
あつ、あそこに白い光が見えます、僕は其処を目指して走り出しました。

「うおおおお……！！！」

しかし其処に居たのは、物凄い速さでスクワットをしている天照大御神様でした……

神様がこちらに気が付いたのかスクワットをやめて話し掛けてきました。

「遅かったな……青……年……？」

何故に疑問形？と思いましたでしたが良く考えると僕の姿はマスターがイメージした姿のままなので、その疑問は正解です。
確かにこの姿で青年は無理がありますしね……
つて、それよりも

「神様！！此所は何処なんですか？」

「此所はあの世とこの世の狭間だ」

……はあ

「それで何で僕は此所に居るんです？」

「我が呼んだから」

……取り敢えず殴ろう……話はそれから！

ブンー！

僕の拳が唸りを上げながら神様の頬に向かっていきます、

ドゴッ！

僕の拳は確かに神様の頬に入りましたが、一ツ気に食わない事が…

「……何故避けなかったんです？」

「…おとなしく殴られるまで、二発目三発目とつづけるだろうと思
ったからじゃ」

……む…

確かにその通りだが見透かされると腹がたちまします。

「それにお主に殴られてもたいして痛くなさ気だし」

この神様は一言余計なんだよ！！

「はいはい、それで神様はそんな僕を一々呼んで何のようです？」

「いや何、お主が転生してから所々見ていたが、お主………弱い
のう…」

グサッ！

僕の心に見えない槍が刺さりました

「……うう…そ、それを言うだけに僕を呼んだんですか？」

「いくら何でもそこまで我は酷くないぞ、そうだな……お主にもう一つ力を与えよう！」

……え…新しい力？

それが有れば今度こそマスターを守りきれる？

「下さい！直ぐ下さい！今直ぐ下さい！」

僕は神様の胸ぐらを掴み激しく揺すります

「わっ、解った、解ったから落ち着け！」

僕は神様の胸ぐらを離して深呼吸をする、
その間に神様は服を正していました

「それでどんな新しい力を貰えるんです？」

「そうじゃな……召喚獣の分解と再結合ができる能力を遣ろう！」

「召喚獣の分解と再結合？それってどんな能力ですか？」

「そうじゃな……お主でも理解しやすく言つと『融合』みたいなもののじゃ」

おお…それは凄い…

僕がそう感心していると神様は

「後の説明は面倒くさいので、またお主の脳の中に知識を直接刻むぞ」

……………ええ……………！

又あの何とも言えない感覚に襲われるのか？！

「ちょっと待って下さい！まだ心の準備が！」

だけど神様は無情にも僕の頭に手をかざし、

「待たぬ！！」

そう言われて僕はまた痙攣しながら気を失うのでした。
しかし気を失う直前に神様の声が聞こえてきました

「次に目覚める時は既に向こうの世界に戻って居るだろう……………」

眠獣です。

ある意味、第一幕終了です。

そして主人公、第二幕に向けてばわーあっぷしました。

こんなSSですがこれからもよろしくお願いいたします。

第11話

Side テオドラ

「…………ふう……」

人知れず溜め息がでる

今日は9月29日、あの大戦から丁度15年が経ったのじゃ……

妾は今日の分の政務を終わらし、ほぼ毎日の日課となったカイトの元へと足を向けている……

正確にはカイトが眠っている部屋にだが……

10年程前にアルビレオが妾に魔導書を預けてから直ぐに行方不明になった時はびっくりしたのじゃが、その次の日に預かった魔導書がカイトに化けた時はそれ以上にびっくりしたものじゃ……………

因みにカイトが妾の所にいる事を知っているのは極少数じゃ

約5年間面倒を診てきたが、カイトは未だに目を覚まさぬ……

だから今日もカイトの寝ている顔を見て1日が終わるんじゃないと思つてた……………

今…この瞬間…カイトの部屋に入るまで……………！！

Side out

カイトです。

あんの神様から呼ばれて帰ってきたらベッドの上にいました。
取り敢えずベッドから身体を出してから近くに在る姿見を見ます
身体はマスターの時と同じでしたが、服装は病院服みたいな感じでした。

ガチャ

…うん……………？

誰かがこの部屋に入って来たようです。

僕は扉の方に顔だけ向けると其処には、何処かで見掛けた様な気がする女性がいました……

「カ、カカ、カ、カイトなのか？」

かなりどもっていますがこの声に聞き覚えがあります。

「そうだけど……………もしかしてテオドラ？」

彼女は無言で首を縦に振っています、

彼女は本当に綺麗になりました……………
ってちよつと待て……………

綺麗になっただと？

「ねえ、テオドラ」

「うむ、なんじゃカイト？」

「あの大战から、どれくらいの時がたっていますでしょうか？」

「何故急に敬語？、っとそれよりどれくらいたったかじゃったな、ちょうど15年じゃ！！」

……は……15年？

神様から新しい力を貰って気絶して起きるまで15年掛かりましたか……

軽く落ち込みます。

「そうじゃカイト！久しぶりに妾にお茶を入れてくれなのじゃ！！」

僕が軽く落ち込んでいる事に気が付いたのかテオドラは氣を利かしてそんな事を言ってくれました。

「ありがとうテオドラ氣を利かしてくれて」

「ふん、別にそんなつもりはないのじゃ……それよりも早くお茶を入れるのじゃ！」

「わかったよ、でもその前に着替え差して下さい」

この格好淒く寒いんです

「そうじゃな……よし妾が服を選んでやるのじゃ！！」

「えっ……お手柔らかにお願いします」

「任せるのじゃ！！」

何故か逆らってはいけない気がした……

僕はテオドラが持ってくる服が普通である事を願っただけである。

そして、10分後

其処には執事服を身に纏ったカイトがお茶の準備をしていた。
何故だろうか男装した女の子にしか見えないのは、

「カイト、案外可愛いのじゃ…」

執事服なのに可愛いとはこれいかに、
でも一応お礼は言わないとな

「ありがとうテオドラ、誉めてくれて嬉しいよ」

「妾が言っというてなんじゃが、可愛いとは男として受け入れて良い
評価なのか？」

「そう言われて腹を立てるような青い時代はとうに終えたから……
むしろおいしい！」

「そうやって周りから愛されるキャラを作って来たのじゃな……」

とそんな雑談をしていると紅茶が良い具合に蒸れて飲み頃になって
きた

僕は温めておいたカップに紅茶を注ぎ、テオドラの前におく
テオドラは香りを楽しんでから一口飲み込んだ

「うむ……おいしいのじゃ、今日一日の疲れが取れるようじゃ」

「ありがとうございます。お世辞でも嬉しいですよ」

僕達はそんな下らない話を小一時間程続けた所でテオドラが

「夜ももう遅い、妾は明日も早いから続きは明日にするのじゃ」

そう言いながらテオドラは部屋から出ようとするが直前に振り返って

「明日も…いやもう今日か…取り敢えずその格好であるのじゃぞ！
予備は其所のタンスに入れといたからの！」

良かった……見掛けは変わっていたけど性格は変わってないみたい
で安心した

ああ、そういえばマスターと紅き翼の事を聞くのを忘れてた……

明日ちゃんとテオドラに聞かないと……

そんな事を考えながら僕はベットに入りまた眠りにつくのであった。

眠獣です。

カイトが男らしい格好をしても全て男装に見られる

これがアルビレオの策の一つです。

因みに大戦から約15年後だと

ネギは五歳の筈だと思う

第12話

カイトです。

只今昼の10時です。

昨日夜更かしをしたせいか寝坊してしまいました。

取り敢えず水で顔を洗い完璧に目を覚ませてから、タンスを開けると中には執事服だけがビツシリと詰まっていました。

僕はその中の一着を手に取り着替え終わると、まるでタイミングを測ったかのようにメイドさんが部屋に入ってきて来ました。

「失礼します、テオドラ様がお呼びですのでお部屋まで御案内致します」

「えっ…あ…はい、わかりました…」

そんなこんなで只今メイドさんと一緒にテオドラの元に向かっていきます。

そして5分くらい歩いたでしょうか、メイドさんが大きな扉の前で立ち止まり僕に向き直って

「テオドラ様はこちらの部屋に居られます、失礼の無いようお願い致します」

そう言い一礼をしてから去って行きました。
取り敢えず僕は扉をノックしました

コンコン…コン

「……うむ、入って良いぞ」

僕は了承が取れたので部屋に入る事にしました。

ガチャッ

其処には書類に囲まれたテオドラが居ました、物凄い速さで書類を処理しています

目の錯覚でしょうか手が8本ある様に見えます、残像？

そして机にある最後の一枚に判子を押してテオドラは、

「よし、此で午前中の分は終わりなのじゃ！」

そう言つてテオドラは部門事に分けている書類を近くにいたメイドに全て持つて行くように指示を出しています。

一通り指示を出し終えた頃にはテオドラと僕しか部屋に居ませんでした。

「これで午後まで時間が空いたのじゃ」

テオドラがそう言いながら身体を伸ばし固まった身体をほぐしています

「カイト、早速で悪いが場所を移すぞ！」

そう言つてテオドラは僕の手を掴み場所を移動し始めめました。

たどり着いた場所は金木犀の木が立ち並ぶオープンテラスでした。

ちょうど今が花を咲かす時期なのか澄黄色の花が綺麗に咲いています。

匂いも芳香で沈丁花や梔子に匂いが似ている様な気がします。

僕が花に見とれているとテオドラが痺れを切らしたのか

「そんな所に立ってないでこちらの方に来て座るのじゃ!」

僕はテオドラの向かいの席に座ると

「ふう…、隣に妾が居るのに花とはいえ他のものに見とれるのは感心しないのじゃ」

「う…ごめん」

「今回は許す、次はないのじゃ!」

「うん、今度から気を付けるよ」

「当然じゃ」

とここまで話して僕は思い出しました、マスター達の事を聞かないと…

「そういえばテオドラ、マスター達は今何処でどうしているの?」

僕がテオドラにそう聞くと気まずげな顔をして、

「ラカンは魔法世界で放浪、詠春は旧世界で関西呪術協会の長をしており、タカミチも旧世界で麻帆良学園の教師をしており、ゼクト殿はあの大戦で亡くなり、ガトウも戦後処理中に亡くなったのじゃ、…アルビレオとナギは今行方不明扱いとなっておるのじゃ……」

ごめんなさい。

僕は心の中で謝ります、折角の良い景色で良い雰囲気だったのに急に空気が重くなりました。

まあそう言ってもゼクトさんとガトウさんが亡くなれたと聞いた瞬間は僕も気が重くなりました。

マスターと他の方達は原作でなんとなく解っていましたから……………それより今はこの重苦しい空気をどうにかしないと！！

「テオドラ様、お茶をお持ち致しました」

そう考えているとまさに天の助けが、先程僕をテオドラの部屋まで案内してくれたメイドさんみたいだ

「うむ、ご苦労なのじゃ処で今日は何の茶葉なのじゃ？」

テオドラもこの重い空気をどうにかしようと頑張っているみたいです。

「今日はジャスミンティーを用意させて戴きました、お茶うけにクッキーも用意しております」

流石本職です、メイドさんは一つ一つ丁寧な手つきでこなしていきます、僕みたいな付け焼き刃とは全然違うようです。

そしてテオドラと僕の前に紅茶とお茶うけを置きどうぞと言われたので、テオドラと僕はほぼ同時にお茶を飲み始めました

「……………おいしい」

悔しい事に僕が淹れた紅茶より格段においしいです、正に天と地ほどの差があります。

メイドさんの方を見てみると僕の声が聞こえたのか少し誇らしげな顔をしています。

ちよつとだけ悔しいのでマスターを見付けたらまた教示してもらおう、僕はそう心に決めました。

それからテオドラは時間が来るまで、僕が眠っていた間に在った事を話してくれました。

「つと、もうこんな時間なのじゃ…」

テオドラが時計を見たので僕も時計を見たら時計は1時45分を示していました。

「妾は仕事に戻るがカイトはどうするのじゃ？」

「そうだね……取り敢えず今日は街を探索してみるよ」

「そうか……明日からはどうするのじゃ？」

「そうだね……マスターを探しに行こうと思う」

「そうか……きっとカイトなら見付られるのじゃ」

テオドラは最後にそう言つて仕事に戻つて行きました。

さて、今から街を探索するか！

暫く街を探索していたら詰所を見付けましたので、一応マスターの搜索願いを出しました。

他にも古本屋が在ったので寄ってみたところ、本だけではなく初級の魔導書も置いてあるみたいです

本七割、魔導書三割、という具合です。

取り敢えず神話や英雄の話が書かれている本を探していたら

『紅き翼く英雄達の辿った道』

という本を見付けてしまい何とか、思わず全巻衝動買いをしてしまいました。

番外編も含めて全34巻もあります。

マスターの搜索はこれを読み終わってからに成りそうです。

眠獣です。

作者は金木犀が大好きです。

カイトの目を覚ましたのが9月30日の設定なのでテラスに金木犀を置きました。

因みにジャスミンは木犀科の一つです。

第13話

カイトです。

昨晚テオドラに次の旧世界行きのゲートが開くのは何時なのか聞いたら、

「ちよつとまで今調べるのじゃ………解ったぞ！今日から3日後の午前5時なのじゃ！」

と言われたのでそれまでテオドラに部屋を借りる事にしました。

そして只今僕は本屋で大人買いをした『紅き翼』英雄達の辿った道』を読んでいます。

この本は子供向けなのか文字が大きく挿絵もあり流血や残酷シーンなどはカットされいていました。

内容を大まかに説明すると、

『正義の魔法使いが世界を滅ぼそうとする悪の魔法使いを倒して世界を救う』

とありきたりな内容に少々変更されていましたが、それを踏まえても面白可笑しく書かれており、また登場人物が全員実在するので面白みにより拍車をかけている。

そんなこんなで読み続けて只今19巻目に入りました。

なんと巻頭キヤラはフードを被ったマスターです。

僕は意味もなくハイテンションになり本を読み始めました。

どうやらこの巻はマスターとナギさんが遺跡に潜り僕と契約をする所みたいです。

僕は自分が登場するという事にちよつとドキドキしています、僕は

震える手で読み進めていると……

コン…コンコン

とノックの音が…

僕は慌てて本を片付けて

「開いてますのでどうぞ入って下さい」

ガチャッ

いつものメイドさんでした。

「失礼致します、テオドラ様からお話がありますので失礼ですがテオドラ様の部屋まで御足労願います」

「解りました、すぐそちらの方に向かいます」

メイドさんは一礼してからすぐに部屋を出て行きました。

そういえば明日の朝一にはもう向こう側に行っているのだから事実上今日でこのこともお別れである、そう考えると感慨深い気がします。

コン…コンコン

「……うむ、入って良いぞ」

ガチャッ

「来たよテオドラ、話ってなに？」

「なに、明日カイトは朝一で出発するのじゃろう？　だから今の内に渡す物を渡しとこうと思つての…」

渡す物？

なにか餞別でもくれるのだろうか？

「カイト、お主は戸籍が無いじゃろうから作っておいたのじゃ…ほれ」

「……………あはは……………ありがとうテオドラ」

すっかり忘れていました、こちらの世界では戸籍が無くてもどうにか為っていました、向こうの世界はそもいきませんからね…

「ついでに身分証明書も作っておいたのじゃ、お主は妾の側近という扱いになる、それを持って魔法関係の支部に行けば色々と便宜を図ってくれるはずじゃ」

おお……………正に至れり尽くせり、暫くテオドラには頭が上がらないなあ

「テオドラ本当にありがとう、このお礼は何時か必ずするよ」

「ふつ、……………期待せずに待っておるのじゃ、それからたまに良いから連絡を入れるのじゃぞ」

「解った、落ち着いたら連絡を入れるよ」

そう言つて僕は部屋を出て行き、今借りている部屋に戻つて来ました。

僕は先程テオドラから貰った戸籍と身分証明書を鞆の中に入れて、他に持って行くものがないか考えます。

「あつ！そくだ本も持って行くか！」

そんな事を呟きながら僕は例の読み掛けの本を旅行鞆の中に入れていきます。

一応全部入りましたがかなり無理して荷物を詰め込んだせいか旅行鞆がばんぱんに膨れて今にも破裂しそうです。

取り敢えず移動する時間を考えてもまだ早いので軽く仮眠をとることにしました……

そして目が覚めて時計を見ると深夜の2時………

「……えっ………！」

少々仮眠をとるつもりが熟睡していたようです。

とまあそう言ってもまだ時間に余裕があります。

けどどする事が無いので僕は早めに城から出る事にしました。

そしてお城から出ようとした時、いつものメイドさんが門の前にいました。

彼女は無言でノートを三冊僕に渡しました。

僕はそのうちの一冊を開いて見ると紅茶の入れ方から美味しい茶葉の見極め方まで全て手書きで書いてありました。

「それを読んで次に会う日までお茶の腕を上げときなさい」

そう簡潔に伝えてメイドさんは僕に背を向けて去って行きました。

……ヤバイ………今ちょっと惚れそうでした………

結局最後まで名前を聞けませんでした。今度会う時には絶対に名

前を聞こうと思います。

僕は胸にそう決意して城から出て行くのでした。

そしてたどり着きました転移ゲートに、只今の時刻は4時20分、40分前なのに結構人が集まって来ています、目算で200人ぐらいでしょうか、

それと何故か知りませんが僕以外の人全員がロープを羽織り時間がくるのを待っています。

なんだか意味も解らず悔しいので近くの売店で一番値段が高いロープを買い羽織る事にしました。

そんな事をしている間に時間に成ったのか転移ゲートが光輝き始めました。

そして転移ゲートの輝きが頂点に達した時にはすでに僕は転移した後でした……………

眠獣です。

作者も予想外でした！！

ある日、何故だか急に主人公とメイドさんのカップリングを思いつきました。

メイドさんの名前も容姿も決まっていけないのに…

ここからどうやってくっ付ければ良いんだろう？

因みに原作キャラとのカップリングは予定にありません。

いったとしても友情までです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6676k/>

作者は不治の病にかかったそうです

2010年10月11日22時43分発行